

千寿園 避難計画甘く

最大想定雨量 考慮せず

九州豪雨で入所者14人が犠牲になった熊本県球磨村の特別養護老人ホーム「千寿園」が策定していた避難計画が、最大規模の大雨が降った時の浸水想定ではなく、より小さな想定を考慮して作成されていたことが判明した。園の顧問弁護士が28日、毎日新聞の質問状に回答した。水防法は最大規模の大雨を考慮した避難計画の策定を求めている。

国は2015年に水防法を改正し「1000年に1度」の豪雨を想定した浸水区域図を作成して水害対策を強化することにした。さらに、翌16年8月の台風10号で岩手県岩泉町の高齢者グループホーム「楽ん楽ん」が浸水し入所者9人が死亡したことを受け、17年6月に再度水防法を改正。最大規模の豪雨を想定した浸水区域にある福祉施設などに避難計画策定を義務付けた。

国土交通省九州地方整備局は17年3月、熊本県人吉市より上流で12時間総雨量502.3ミリの「1000年に1度」の雨が降った場合、

千寿園周辺は広範囲に10〜20ミ未満浸水するとの浸水区域図を公表した。同時に九地整は12時間262.3ミリの「80年に1度」の浸水区域図も公表。この場合、園自体は浸水せず、周辺の浸水も0.5ミ未満とされており、園はこのケースを考慮した避難計画を策定し、村に提出していた。

この判断について、園の顧問弁護士は「地区全体が水没するという、規模があまりにも大きすぎる（想定のため、避難計画の策定で考慮することができなかった）」と回答した。

国交省によると、豪雨当日の球磨村の12時間雨量

（3日午後7時〜4日午前7時）は439.3ミで、国土地理院によると、園周辺は2〜3ミ浸水したと推定される。園は1階の天井部分まで浸水した。

国交省によると20年1月現在、全国で7万7906施設が水防法に基づく避難計画策定を義務付けられているが、策定済みなのは45%の3万5043施設にとどまる。【中里頭、城島勇人、吉川雄策】

施設側が備えを

広瀬弘忠・東京女子大名誉教授（災害リスク学）の話 避難計画を策定するだけでは場当たりの対応になってしまふ可能性があり、施設側が細かく気象情報をチェックし避難に備えることが大切。危険な立地を避けて施設を建設することも重要だが、今は民間任せになっているので、国の費用助成も含めた用地確保の支援策が必要だ。